

第65回 “社会を明るくする運動”

作文・ポスター・標語

第34回

中学生生活体験発表



この作品集は一部共同募金の  
配分金を受けて作成しました。

平成27年度

“社会を明るくする運動” 射水市推進委員会  
射水保護司会

# ”社会を明るくする運動“とは

”社会を明るくする運動“とは、すべての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪のない明るい社会を築こうとする全国的な運動です。

この運動は、終戦後の荒廃していた社会の中で、住む場所も食べる物もなく街にあふれていた子供たちの将来を危惧した東京・銀座の商店街の有志の方々が行った催し物「銀座フェア」がきっかけとなって始まり、その後、法務省の主唱によって行われるようになりました。

毎年七月を強調月間と定め、全国各地でより多くの住民や団体の理解と参加の下、地域の特色を活かしながら、大人と子供が気楽にふれ合えるような様々な活動が行われています。

犯罪や非行が生まれるのは地域社会であり、また罪を犯した人や非行をした少年が更生を果たす場も地域社会です。よって、その更生を実効あるものにするためには、本人の意思と併せ、本人を取り巻く地域社会の理解と協力が不可欠なのです。

犯罪や非行の防止活動を行うのは、地域に住む人誰もが、それぞれの地位や分野で、もてる力を出し合うことによってできるものなのです。決して特別の人に限られるものではありません。物心両面にわたって”社会を明るくする運動“に参加・協力している人が地域社会にたくさんいらっしゃいます。

地域の安全・幸せは、地域に住む人たちみんなの願いです。責務です。



## 作文の部 受賞伝達式



## ポスターの部 受賞伝達式



## 標語の部 受賞伝達式



## 第34回 射水市中学生 生活体験発表大会 受賞伝達式





# 作品コンテスト優秀作品 (ポスターの部)



射水市立東明小学校  
5年岡田 恵 祐



射水市立小杉小学校  
6年金子 蒼 奈



射水市立堀岡小学校  
5年原田 莉 沙



射水市立大島小学校  
5年棚元 祐 吏



射水市立小杉小学校  
6年中川 紅 海



射水市立大門小学校  
5年土台 美 佑



射水市立下村小学校  
6年山口 円 香



射水市立金山小学校  
5年水上 楓



射水市立新湊南部中学校  
3年木谷 凪 咲



射水市立塚原小学校  
5年荒瀧 葵



射水市立東明小学校  
5年海野 凜々子



射水市立作道小学校  
5年長田 映 佑

## (標語の部)

あいさつは  
みんなをえ顔に  
するまほう  
射水市立小杉小学校  
四年生 西田 夢 杏

だれにでも  
ニコニコあいさつ  
元気よく  
射水市立塚原小学校  
五年生 明石 健 吾

あいさつは  
明るい笑顔で  
自分から  
射水市立東明小学校  
四年生 岩井 蓮太郎

犯罪は  
あくの道への  
第一歩  
射水市立堀岡小学校  
四年生 村田 宏 樹

おはようの  
言葉でつながる  
心と心  
射水市立作道小学校  
六年生 宮崎 翼

その笑顔  
わたしに元気  
くれている  
射水市立放生津小学校  
六年生 鳥取 瞳

おはようで  
始まる今日も  
楽しい日  
射水市立新湊中学校  
二年生 手林 奈 央

あいさつで  
みんなわくわく  
元気な子  
射水市立大島小学校  
四年生 川原 歩 太

ありがとう  
その一言で  
いい気持ち  
射水市立大門小学校  
四年生 石井 のどか

スマートフォン  
無料の言葉  
やみのドア  
射水市立下村小学校  
五年生 澤 李 緒 菜

思いやる  
気持ちがあれば  
みな笑顔  
射水市立中太閤山小学校  
五年生 仕切 優那泉

万引きは  
絶対ダメだよ  
犯罪だ  
射水市立歌の森小学校  
四年生 大坪 結 愛

## 作品コンテスト表彰式



## 作品展示会場





第65回 “社会を明るくする運動” 射水市推進委員会 委員長

射水市長

夏野元志

## 発刊に寄せて

すべての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、安心して暮らせる地域社会を築くために、全国的な取り組みとして、“社会を明るくする運動”が続けられています。

毎日のように痛ましい事件・事故が報道され、とりわけ青少年が絡む犯罪が取り沙汰されていますが、犯罪や非行を生み出さない家庭や地域づくりには、一人ひとりが考え、参加する機会が大切であり、この運動は大きな役割を果たしています。

そうした中、本市では、射水保護司会が中心となって、本運動の一環として、市内小学6年生を対象に薬物乱用防止教室を開催しているほか、小・中学生を対象に、「日常の家庭生活、学校生活の中で、犯罪や非行などに関して、日頃考えていることや体験したこと」をテーマに、作文や標語、ポスターを募り、「作品コンテスト」を行っています。

本文集は、中でも特に優秀な作品を収録したものです。この文集を通して、より多くの方々に、非行問題などに対する意識を更に高めていただき、児童生徒の皆さんの日頃考えていることや行動に対して理解を深めていただければと思います。こうした活動に継続して取り組んで行くことが、犯罪や非行のない明るい社会の実現につながるものと思います。

本市は今年誕生10周年を迎えました。引き続き、だれもが安心して安全に暮らせるまちづくりを推し進めるとともに、未来を担う子どもたちが、希望を持っていきいきと生活できるよう各種施策に取り組んでまいります。

結びに、本運動にご賛同いただき、作品の取りまとめ等にご尽力賜りました学校関係者並びに保護司各位に厚くお礼を申し上げます。発刊に当たったつてのごあいさついたします。



射水保護司会 会長 五十嵐 繁久

## 文集刊行にあたって

第六十五回「社会を明るくする運動」は、犯罪や非行のない明るい社会を築こうとする全国的な運動です。今年で第六十五回を迎えました。この運動は法務省が主唱し、国や地方公共団体と保護司会などの民間公共団体が一体となって実施しており、犯罪や非行をした人の立ち直りにについての理解を呼びかけています。

射水市でも「中学生生活体験発表大会」を開催し、市内小・中学生を対象に日常生活、学校生活を通し日頃考えていることを題材に、作文・標語・ポスターの作品を募集いたしました。作品コンテストには、市内小中学生から一千九百九十六点と多数の応募をいただき誠にありがとうございました。

厳正な審査の結果、各部門別に優秀作品を選び、十月四日に作品コンテスト表彰式を開催いたしました。大利文雄富山保護観察所長列席のもと、射水市推進委員長（射水市長）夏野元志様から受賞者ひとりひとりに賞状、賞品が贈られました。受賞された生徒様には心からお祝い申し上げます。

優秀作品・中学生生活体験発表大会の文章を本誌に掲載させていただきました。中学生生活体験発表大会や作品コンテストの活動を通し射水市教育委員会・各小学校・中学校のご指導ご協力により進めることができました。改めて、厚くお礼申し上げます。

一連の活動を通して犯罪や非行のない、子どもたちがスクスク育つ社会、安全・安心な地域を築いていけるよう、市民の皆様と共に推進していきたいと思えます。今後ともご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。



# 第65回 “社会を明るくする運動” 作品コンテスト

## 目次

発刊に寄せて…………… “社会を明るくする運動” 射水市推進委員会 委員長  
射水市長

文集刊行にあたって…………… 射水保護司会 会長  
五十嵐 繁久 2

### 作文の部

「親切のリレー」……………	射水市立中太閤山小学校	六年	川 潤 遙	6
「花を植えよう」……………	射水市立大門小学校	六年	塚 本 葉	8
「思いやりの大切さ」……………	射水市立新湊南部中学校	二年	片 岡 萌々音	10
「本当の友だち」……………	射水市立射北中学校	三年	橋 本 笑 里	12
「心があたたかくなる行動」……………	射水市立作道小学校	五年	山 崎 菜 々	14
「地域・人とのつながりを大切に」……………	射水市立片口小学校	六年	中 遙 菜	16
「私ができることは」……………	射水市立小杉小学校	五年	野 上 心 花	18
「社会を明るくしているのは『見守り隊』の方々」……………	射水市立太閤山小学校	六年	高 松 愛 奈	20
「笑顔が見たいから」……………	射水市立小杉中学校	三年	嶋 結 理 子	22
「コミュニケーションの大切さ」……………	射水市立小杉南中学校	二年	夏 住 文 梨	24
「地域の広がる優しさ」……………	射水市立新湊中学校	二年	縄 井 若 菜	26

### 法務省 “社会を明るくする運動” 中央推進委員会主催

#### 第64回 “社会を明るくする運動” 作文コンテスト 法務大臣賞（最優秀賞）

小学生の部 「おじいちゃんの野菜」……………	鹿児島県 小学校	五年	坂 本 文 音	28
中学生の部 「許してやらない」……………	愛知県 中学校	三年	上 村 彩 奈	30

### ポスターの部

#### 標語の部

#### 第34回射水市中学生 生活体験発表大会

「今、自分を乗り越える」……………	射水市立大門中学校	三年	佐 藤 美 緑	38
「たった一人の妹のために」……………	射水市立小杉中学校	三年	高 畑 成 美	40
「家族のおかげで」……………	射水市立射北中学校	三年	土 井 明 音	42
「人のためにできること」……………	射水市立新湊中学校	三年	島 遙 香	44
「生まれる前からずっと」……………	射水市立小杉南中学校	二年	小 川 真 穂	46
「平和を願って」……………	射水市立新湊南部中学校	三年	高 田 菜 生	48



第65回 “社会を明るくする運動”

作文コンテスト 入賞作文集





〔射水市推進委員会推薦作品〕

## 「親切のリレー」

射水市立中太閤山小学校 六年 川 湊 遥

ある雨の日の朝のことです。この日は、いつもよりどしゃぶりの雨が降っていました。角を曲がると、一年生の男の子が壊れたかさを持ちにくそうにしている、困っている様子でした。

「どうしたの。」

と声をかけると、

「ぼくのかさの持ち手が壊れちゃった。」

と壊れたかさを見せてくれました。わたしは、一年生の男の子がこの雨の中、持ち手が壊れたかさをさして歩くのは大変だし、かわいそうだなと思いました。そこで私は、自分のかさを男の子に貸してあげることになりました。私がかさを渡すと、男の子の顔がパアツと明るくなり、

「ありがとうございます。」

と笑顔で言ってくれました。その笑顔を見てわたしは、声をかけてあげてよかったと思いました。その後、男の子は私が貸したかさを大事そうに肩にもたせかけ、雨に濡れないようにゆっくりと歩いて、私と一緒に学校まで行きました。学校に着くと、児童玄関前に校長先生が立っておられたので、

「校長先生、おはようございます。このかさはこの子のかさなんですけど、持ち手が壊れているんです。どうしたらいいですか。」

と聞きました。すると、

「これは直らないと思うよ。その男の子はどうやって学校まできたの。」と聞かれました。それで私は、

「私がかさをさして、男の子に私のかさを貸して一緒に学校まで来ました。」と説明しました。すると、校長先生はちよっとおどろいたような、うれしそうな笑顔になって、

「えっ、かさを貸してあげてくれたの。ありがとう。」  
と言ってくださいました。

私が出た、男の子にかさを貸してあげるというたった一つの行動で、二人の人が笑顔になりました。どしゃぶりの雨の中、男の子と校長先生、二人の笑顔を見た私の心の中には、太陽がにこにこ顔をのぞかせていました。

私は、一年生の男の子のような助けられる立場には今まで何度もなつたことがあります。

一年生のころのことです。縦割り清掃の時間、私は何かとても困っていました。そんなとき、六年生のリーダーが助けてくれました。一年生のころのことなのであまりはつきり覚えていないのですが、助けてもらったときの「リーダーありがとう」といううれしかった気持ちは、今でもはつきりと思い出せるほど、とても強く印象に残っています。振り返ってみると、私は今までたくさんの人に助けられてきました。最高学年になって、今までは助けられてばかりいた私が、今度は他の人を助けてあげた……。まるで親切のリレーのようです。

このように考えると、一年生の男の子の笑顔を見たときの温かい気持ちは、親切のバトンを渡した瞬間のすがすがしい気持ちでもあったのだと思います。親切のリレーは、人を笑顔にすることができると思います。私が何人もの人から親切のバトンを受け取り、渡せたように、私がバトンを渡した人たちが次の人へとバトンを渡していってくれると、多くの人の笑顔が見られる明るい社会になっていくと思います。

私は、これからも親切のバトンを渡す、リレーメンバーの一員であり続けたいです。

〔射水市推進委員会推薦作品〕

## 「花を植えよう」

射水市立大門小学校 六年 塚元 葉

ある日、

「どろぼうが来ない町にするためにはどうしたらいいか知ってる？」

と、お母さんが聞いてきました。

わたしは、どろぼうがこない町にするには、出かける時には、必ずかぎをかければいいのかと思つたし、防犯カメラをつけるのも、よいアイデアだと考えました。

わたしが考えた答えをお母さんに話したら、どちらもちよつとちがうと言われました。もっと素敵な方法があると言つたのです。

それは、みんなの家の前に花を植えることだとお母さんは教えてくれました。

わたしは、どうして花を植えるだけでどろぼうが来ることが無くなるのか、不思議に思いました。そして、その答えを聞いて、花にそんな力があることにびっくりしました。

花を植えると、どうなるのでしょうか。

花を育てるためには、水やりをしないとダメです。水やりをするためには、外に出なければなりません。すると、となりの家の人や近所の人顔を見たり、話をしたりすることになります。そうすると、近所には、どのような人がくらしているのか分かるし、外に出ることによって、どろぼうは、人がいる所には、顔を見られてしまうから、行き



にくくなります。

このような理由で、花を植えることが、町の安全につながるということが分かりました。

わたしは、花を植えるということは、他にもいいことがあると思います。

それは、花があることでポイ捨てする人が少なくなるということです。せっかくなのできれいに咲いている所に、ごみを捨て、花を枯らす人はいないと思います。

それから、町全体が花に包まれていると、カラフルで、とてもきれいになるし、町にいる人の気持ちが明るくなり、いろんな効果が表れます。

わたしが、住んでいる町でも、毎年、一株ずつ配られています。犯罪防止のためでもあり、町がきれいになることにより、住んでいる人の心も豊かにしてくれるからだと思いました。

人の心が、豊かになると、人を思いやる気持ちが生まれ、みんな助け合う気持ちが生まれると思います。そうすると、明るい社会につながると思います。

たった一株の花でも、いろんな力があります。

わたしは、今は、まだ小学六年生なので、小さな力しか持っていません。でも、一株の花のように、自分から勇気をもって出来ること。例えば、自分から、進んであいさつをしたり、公園や家の周りに落ちているゴミを拾ったり、困っている小さな子を見かけたら、声をかけてお手つだいをしたりして、みんなが気持ちよくすごせる社会をつくれるようにがんばりたいです。

## 「思いやりの大切さ」

射水市立新湊南部中学校 二年 片岡 萌々音

私には、「思いやり」について考えていることが二つあります。まず一つ目は、私の家族に関することです。

私の祖父は、戦争を経験しています。おそらく、みなさんのおじいさんより、年をとっていると思います。

私が三歳のとき、祖父が脳内出血で倒れ、左半身が不自由になり、車いす生活になりました。一家の大黒柱だった祖父が倒れたことにより、畑も、田んぼも、家の様々な仕事など、たくさんのお仕事を、家族みんなで頑張らなくてはいけなくなりました。その上、車いすということで祖父の身の周りの世話なども増え、家族みんなが大変な状況になりました。私は、まだ幼かったので、そのときは、よく覚えていません。しかし、父も、母も、祖母も、いつも忙しそうにしていたことだけは、はっきりと覚えています。

その当時の私は、車いすに乗っている祖父のことは特別なことではなく、普通だと思っていました。そして、嫌な顔一つ見せずに、祖父の車いすを押して出かけたり、おむつを替えたりしている父の姿も、当たり前のように思っていました。そのような生活が、もうすぐ、十一年になろうとしています。

しかし、今改めてこの生活を振り返ってみると、私が当たり前だと思っていたことは、実はそうではない、と思うようになりました。父の様子を見ると、たまには祖父の世話が辛そうだと感じる時がありました。けれど、父はどんなことでも最後までやり遂げていました。私は、父のことを本当に素晴らしいと思っています。

私が大人になり、もし父や母と同じような状況になったとき、果たして私は、同じように世話ができるだろうか…私にはできないのではないかと思ってしまう。

人は、支え合っていかなければ生きてはいけない、という話を聞いたことがあります。私は、本当にその通りだと思います。周りの人の事を考え、行動できる人になりたいです。

二つ目は、友達に関することです。私が気になっているのは、小学校や中学校で、友達に対して傷つけるような言葉を言ったり、仲間はずれにしたり、無視したりする人がいるということです。

もちろん、私も気がついていないだけで、誰かに同じようなことをしてきたかもしれません。相手を傷つける態度は、絶対にいけないことです。自分がもし、同じようなことをされたら、とてもいやな気持ちになります。自分がされたらどう思うか、自分におきかえて考えることが大切です。自分が嫌だなど思うことは、相手にも絶対にしてはいけません。

はじめに書いた、私の祖父のことと友達のこと、この二つの話は、一見関係がないように思えます。しかし、よく考えてみると、どちらも相手のことを思いやることが大切だという点で共通しています。

私の将来の夢はまだ決まっていませんが、思いやりをもって、人のために役立てる大人になりたいです。そして、相手が誰であっても、親切な心を忘れずに付き合っていきたいです。これから大人になり、社会へ出ていくときでも、常に人を思いやることを大切にしていこうと思います。



〔射水市推進委員会推薦作品〕

## 「本当の友だち」

射水市立射北中学校 三年 橋本笑里

去年の夏、私はある一冊の本と出会いました。夏休みの課題の読書感想文を書くため、題材探しに行った書店で見つけたその本。タイトルは「きみの友達」。

この本で印象に残っている言葉があります。それは

「友だちは人数じゃない。いなくなっても、一生忘れない友だちが、一人いればいい。」

という、登場人物の言葉です。この言葉を読んだとき、私はこの登場人物の気持ちがあくわかりませんでした。なぜなら、私にしてみたら、友だちは一人でも多いほうが楽しいと思うし、一生忘れない友だちがたった一人だけだとしても、あまりにも寂しすぎるからです。

今や、インターネットやSNSで簡単に友だちづくりができてしまう時代です。会ったことがなくても、顔や年齢、住んでいる場所すら知らなくても、友だち登録のボタンひとつで友だちになれてしまう時代なのです。だからなのはわからないけど、人より友だちの数が少ないと、変な敗北感や情けなさを感じてしまうのです。

しかし、この本を読み進めていくうちに、登場人物の言葉が少しわかった気がしました。

それは、あるひとつの出来事を思い出したからです。何気ない中学校生活を送っていたある日、A子ちゃんが私に言いました。

「えりさあ、B子ちゃんの悪口言っとたって聞いたんやけど……。」

私はB子ちゃんが好きなので、悪口なんて絶対に言うはずがありません。私は全力で否定しました。しかし、この、

どこから出てきたかもわからない情報がきっかけで、私とB子ちゃんとの間には誤解が生まれ、どんどん気まずい関係になってしまいました。私とB子ちゃんを引き離すために仕向けられた。わな“だったのかどうかはいまだに分らないままですが、そのときの私は、言ってもいないウソの情報を流され、B子ちゃんとの関係も悪化し、ただただ落ち込む毎日でした。しかし、そんな私の傍にそっと寄り添ってくれた子がいました。それは同じクラスのC子ちゃんでした。C子ちゃんは何度も私の相談に乗ってくれ、最後まで

「えりは絶対に言っていないよ。」

と、私のことを信じてくれました。本当に嬉しくて、母にもそのことを話しました。すると母はこう言いました。

「楽しいときだけじゃなく、辛いときにこそ傍にいてくれる友だちを、ずっと大切にするんだよ。」

リアルな世界やネットの世界に、それなりの数の「友だち」と呼べる人がいて、日々楽しいことを共有しているも、いざ私がおかにならんだり、窮地に立たされたりして辛いとき、すぐに駆けつけて傍にいてくれる友だちってどれくらいいるんだろう……そう考えると、少し不安になります。しかし、あの出来事がきっかけで、C子ちゃんは、私にとっては決して薄っぺらではない「本当の友だち」であることに気づくことができたし、私もC子ちゃんにとっての「本当の友だち」になりたいと心から思いました。

「本当の友だち」とは何か。その答えを見つけないまま時間がかりそうだけど、私はこれからの生活の中で、

「本当の友だち」の意味を考えながら、「本当の友だち」と思える人を見つけ、その人を大事にしたいと思います。

そして、私も誰かにとって、一生忘れない「本当の友だち」だと思ってもらえるような人になりたいと思います。

最後に。最近、私にとっての「本当の友だち」が一人増えました。

「あれは一体なんだったんだろうね。」

そう言って笑いあうその子は、B子ちゃんです。

## 「心があたたかくなる行動」

射水市立作道小学校 五年 山崎菜々

私は、犯罪や非行のない明るい社会のため、したらよいことや、自分にできること、心があたたかくなる行動をテーマに考えました。

まず、心があたたかくなる行動の一つ目は、あいさつ運動をすることです。私の学校では、毎月二十五日に、『ここにこあいさつ運動』をしています。私は、あいさつをしたり、してもらったりするととても気持ちよくなり、心があたたかくなります。また、地いきの人にも積極的にすると、笑顔で「おはよう。」と言ってくれます。あいさつをすると、地いきの輪を広げることができたり、仲を深めることができると思ったので、社会を明るくするためには、あたたかい声や、笑顔が必要だと思いました。あいさつは、一人一人が気をつければ明るくなるし、自分にもできると思いました。

二つ目は、差別をせず、仲良く、平等にすることです。最近はやっている、スマートフォンで、LINEなどのいじめがあることをニュースなどで知りました。差別や、いじめは、人間関係をこわしてしまうので、よくないです。仲良くすると、友達のいいところを見つげることができて、毎日が楽しく、充実することができます。この世の中、イン

ターネットの世界で大切な友達を失うことは、悲しいです。人と人の気持ちを分かり合えば、こんな問題にならず、社会を明るくすることができると思いました。いつでも仲良くすることは、私でも、だれでも、なおそうと思えば、きちんと守れることだと思いました。

三つ目は、すすんでボランティア活動をすることです。私は去年、地いきの老人ホームのボランティアに参加しました。このボランティアでは、ベッドのシーツこうかんや、まどふきをしました。どれも、使う人が気持ちよく使うことができるように一生けん命しました。人の事を考えながらすることは大事だとその時、改めて思いました。お話ししたときも、おばあちゃんや、おじいちゃんが、笑顔であく手してくれました。そのときは、とても心があたたかくなりました。ボランティアをすると、人のために何かをすることを知り、それを、さらに「やりたいな。」という気持ちになれると思ったので、社会を明るくするためには、ボランティア活動と人のためにすすんでやるという気持ちも大切だと思いました。今年も参加するので、これからも、続けていきたいと思いました。

このように心があたたかくなる行動はたくさんあります。相手のことを思うことで、人の力になりたいと思う気持ちが強くなります。やさしい気持ちと、笑顔あふれる町づくりに協力したいと思います。子どもでも、出来ることがある限り、よりよい社会をつくるためにがんばりたいと思いました。心があたたかくなる行動は、よい未来をつくることにもつながるのでだれにでも感謝される人になりたいと思いました。

## 「地域・人とのつながりを大切に」

射水市立片口小学校 六年 中 なか 遙 はる 菜 な

私は、社会を明るくするには、「地域・人とのつながり」が大切だと思います。

わけは、地域のお年よりなど、おなじ片口に住んでいても知らない人が多いので、地域の人とのつながりを大切にしたいと思ったからです。

私は毎朝登校してくると中に、「おはようございます。」と地域の人にあいさつしているし、下校のときも、「こんにちは。」、パトロールたいの方には、「いつもありがとうございます。」とあいさつしています。

また、私の住んでいる第三自治会では、毎年、「第三自治会ポウリング大会」があります。この大会には、片口の人ほとんど来るので、つながりをふかめることができます。ついこのあいだも大会があったのですが、たくさんの方が来ていました。私がスペアやストライクをとると、となりのレーンの人が、「すごいね。」と一緒に喜んでくださったのがとてもうれしかったです。片口には他にもいろいろな行事があります。私は、このような行事にでると、地域の人とのつながりが深まると思うので、すすんで参加していきたいです。それぞれの地域のつながりが深まると、社会



のつながりも深まり、いじめなどがなくなるんじゃないかなと思います。

地域の人は、私たちにとっても協力してくださっています。たとえば、「とねりこパトロールたい」や、「米づくり」などです。私は、このようにいろいろな協力をしてくださっている地域の方に感謝することも、つながりを深める方法の一つかなと思います。

私が社会を明るくするために必要なことは、「人とのつながり」かなと思いました。人とのつながりを強くすれば、いじめも少なくなっていく。自殺する人なども少なくなるんじゃないか。そう考えたからです。私も、「人とのつながり」を大切にしながら生活していきたいです。いじめがない社会になってほしいです。

# 「私ができることは」

射水市立小杉小学校 五年 野<sup>の</sup>上<sup>がみ</sup>心<sup>しん</sup>花<sup>か</sup>

ある日、私が小学校から帰ると、

「あれ？この看板どうしたんだろう。」

家となりの田んぼの間のさくに、見慣れない「ゴミ捨て禁止」の看板がありました。

おじいちゃんに聞くと

「田んぼがゴミだらけだったんだ。」

とおこっていました。ビニールぶくろ、ビールやジュースの空きかん、カップラーメンの容器、残高のない通帳まで捨ててあり、びっくりしたそうです。それで、ゴミをしょ分してから、市役所で「ゴミ捨て禁止」の看板をもらって取りつけたそうです。それを聞いて私は、おじいちゃんは何も悪いことをしていないのに、ゴミを捨てたり、また捨てる人がいないか確認しなければならず、大変だと思いました。

でも、おじいちゃんに聞いてもつとおどろいたのは、ふだんも田んぼの中には小さなゴミがよく捨てられている、ということでした。そのため、田植えや稲かりなどの田んぼの仕事の前には、まずみんながゴミ拾いをするそうです。そうしないと、大型の農業機械にゴミが入ってこわれてしまうからです。

私は今、社会の勉強でお米について勉強しています。だからお米を育てるのは大変だと知っていましたが、さらにごみ拾いまでしないといけないなんて、おじいちゃんたちが損をしているような気持ちになりました。

おじいちゃんの話聞いて、思い出したことがもうひとつあります。いとこと一緒に下校しているとき、私が

「家まで、たばこやライターが落ちている数を数えよう。」

と言って二人で調べてみると、たばこが六十五本、ライターが二十五個も落ちていました。次の日にいとこが調べると、いとこの家から学校までは、たばこが五十六本、ライターが三十二個もあったそうです。私は「どうしてこんな燃えやすいものを道路に捨てるのだろう。」と不思議でした。しかも、たばこは一か所に二十本くらい、ライターは五本くらいまとめて捨てて捨てるが多かったです。いとこは、

「二人が捨てたら、ほかの人も『自分も捨ててもばれないかな』と考えてしまうんじゃないの。」  
と言っていました。

田んぼのゴミも、道路のたばこやライターも、ゴミ箱まで持って行って捨てるのは簡単なことなのに、その場に捨ててしまうのは軽い気持ちなのかもしれません。「だれも見えていない」「他の人もやっている」という心もあるかもしれません。でも、そのゴミを拾って捨てなければならぬ人のことを考えると私は絶対にポイ捨てをしたくないと思いました。

これらのゴミのことだけでなく、ルールを守らない行動をすれば、小さなことでも人に迷わくがかかります。だから、周りの人へのえいきょうを考えてから行動すれば、みんなが安心してくらすようになると思います。

今、自治体では犯罪をへらすために、ゴミ拾いやあいさつ運動に取り組んでいるところがあると聞きました。ゴミ拾いをするとうゴミをしょ分する大変さがわかるし、あいさつ運動をすると気持ちが明るくなり、相手に迷わくをかけないようになろうと考えるようになると思います。

私一人では、明るい社会にするためにできることは少ないけれど、仲間を増やせば大きな力になるので、このような活動があれば参加したいと思いました。みんなが安心してくらすために、みんなの手をつないで活動できたらいいなと思います。

# 「社会を明るくしているのは『見守り隊』の方々」

射水市立太閤山小学校 六年 高松愛奈

太閤山小学校には、子どもたちの登下校の安全を毎日支えてくださる『見守り隊』の方々が大勢います。わたしの住んでいる五歩一地区では、学校に行くまでいっしょに歩いてくださっている方や、横断歩道をわたるところに立ってくださっている方などと、とてもたくさんの方が私たちを見守ってくれています。

わたしは、後ろから来る自転車に気づかず歩いていました。すると『見守り隊』の方は、「後ろから自転車が来るから、危ないよ。」

とやさしく声をかけてくれました。『見守り隊』の方がいなかったら事故にあっていたかもしれませんでした。

だから、いつも安全に登下校をできているのは、『見守り隊』の方がいるからなんだとあらためて思っています。

『見守り隊』の方々が見守ってくれる分、わたしたちはありがとうの気持ちをこめてあいさつをして、いつものお礼としています。

わたしは、あいさつだけでは、ありがとうの気持ちが伝わらないと思うときがあります。そのときは、『見守り隊』の方々に、「いつもありがとうございます。」や「これからもよろしくお願いします。」などとお礼の言葉を書いてわたします。すると、『見守り隊』の方はとてもすてきな笑顔でありがとうと言ってくださって、受けとってくださいるので

うれしいです。

『見守り隊』の方は、私たちを見守ってくれるだけでなく、わたしのことを少し助けしてくれることがあります。わたしがとっても荷物が重くてつかれているとき、荷物を持ってくださったり、「がんばれ」や「もう少しで学校だよ」と言ってくださったりするので、とってもうれしかったです。

『見守り隊』の方は、とっても心のやさしい人ばかりなので、私も友達に、荷物を持ってあげたり、あったかい言葉をかけてあげたりして、友達が喜んでくれることをしたいです。

わたしは、家がみんなより少し遠いけど、『見守り隊』の方々のおかげで学校へ行くのも、あまりつかれなくなりました。だから、『見守り隊』の方々には、とても感謝しています。

わたしは、『見守り隊』の方々にあいさつはとてもいいことだと教えてもらいました。わたしは、あいさつをすると相手の人は、本当にいい気持ちになるのかなと思っていました。すると『見守り隊』の方は、元気に「おはよう。」とわたしに言うてくださいました。わたしは、その「おはよう。」で今日も一日がんばろうと思い、「おはようございませう。」と返しました。『見守り隊』の方の「おはよう。」のおかげで、わたしは、あいさつをすると相手の人がいい気持ちになるといことが、分かりました。

『見守り隊』の方々が、わたしたちの安全を見守ってくださいたり、わたしたちにあいさつをしてくださったり、わたしたちに親切にしてくださいたりのおかげで社会が少しずつ、少しずつ、明るくなっているのだと思います。



# 「笑顔が見たいから」

射水市立小杉中学校 三年 嶋<sup>しま</sup> 結理子<sup>ゆりこ</sup>

「ぐらっしゅー！」

この一言から一日の仕事が始まる。

私の祖父母は自営業で洋食屋を営んでいます。祖父は料理人、祖母は接客をしています。その仕事をたった二人でこなすのです。また、今年で創業四十周年を迎えました。一生懸命に働く姿を幼い頃から見えてきた私はそんな祖父母が大好きです。

ある日、1本の電話がかかってきました。その電話は祖父からでした。

「明日、学校休みなんやろ？店、手伝ってみんけ？」

と言いました。私は一瞬戸惑いました。すると祖父は、

「大丈夫や、中一にもなったんやし、一回経験してみられ。」

そう言いました。不安もありましたが、母の勧めもあり翌日手伝うことにしました。

次の日の昼前、店に着くと身支度をし、エプロンに着替えました。すると、あまり感じたことのない新鮮な感覚がしました。そして、一度大きく深呼吸をしました。開店と同時にお客さんが入って来られました。すると、祖父母は大きな声で笑顔で、

「ぐらっしゅーいませー！」

と言いました。十二時になると会社が昼休みになるので多くのサラリーマンなどで店が満席となりました。忙しいな

がらもお客さんに素早く対応し、笑顔で一生懸命に働く祖父母の姿がとても輝いて見えました。最後のお客さんが帰り、みんなで昼休憩に入ったときのことです。私は祖父に、「どうしていつまでも仕事を頑張ることができなの？」と質問すると祖父は、

「お客さんの“笑顔”を見れるのが一番うれしい。また、頑張ろうという気持ちになれる。」と答えました。その言葉を聞いた瞬間、とても胸がジーンと熱くなりました。そして、その日から自分も将来、人を笑顔にする職業に就きたいと思うようになりました。

そして一年後、「十四歳の挑戦」で、「竹内進興センター」という事業所で活動させて頂きました。初めてのことはわかりでしたが、祖父の言葉を思い出しながら仕事をしました。少しずつ慣れていくと仕事を任せてもらえるまでとなりました。また、休憩中に職場の方々とコミュニケーションをとることで互いに信頼関係を築き、協力して仕事をすることも分かりました。主に私は、花の手入れをしたり、葬儀ホールでの花の飾り付けや片付けをしたり、花束を作ったりしました。活動していくうえで大切だと思ったことは、一人ひとりのお客さんに喜んでもらえるように仕事に取り組むことだと思いました。とても充実した五日間はあっという間に過ぎていきました。

私の身の回りにはたくさんの人達が働いています。いろいろな職業があります。その一つ一つの職業にはさまざまな役割があります。そしてこの世の中には、多くの人々が支えられながら社会が成り立ち、家族と生活が出来て、今の自分達がいるのではないのでしょうか。今、社会の一員として働けたことに感謝したいと思っています。また、世界中の人々が笑顔で輝ける社会になってほしいと願っています。

次の日、祖父から電話がかかってきました。

「経験したことを生かしてこれからも感謝の気持ちを忘れず前に進みなさい。」

と…。今日も仕事を頑張る祖父母の姿が思い浮かんだ。全てはお客さんの「笑顔」が見たいから…。

# 「コミュニケーションの大切さ」

射水市立小杉南中学校 二年 夏なつ住ずみ文あや梨り

私は、「犯罪・非行」についてニュースや新聞で見たりしても、それについて深く考えたことがなく、他人事と思っていました。でも、この作文を書くにあたり、改めて今、社会でどのようなことが起きているか考えてみることにしました。

最近、テレビのニュースを見ると自分とあまり年の変わらない未成年の人の犯罪が増えているように感じます。今日も「高校生が殺人事件を起こす」という、とてもショッキングなニュースが流れていました。しかも被害者と高校生は面識がなく、犯罪理由は「家族のことでストレスがあり、イライラしていた」という身勝手なものでした。自分のストレスを晴らすために「人を殺す」という、人間としてやってはいけないことを行うのは決して許せないと思いました。

人間は、誰だって不安や悩みを抱えながら生活していると思います。私も、勉強や部活動、友達との関わり方などでいろいろな悩みを抱えており、イライラして上手くストレスを発散できないことがあります。でも、家族や仲の良い友達と会話することでイライラした気持ちを押しさえることができます。

この高校生は、様々な悩みを抱えていて、犯行理由にもあったように家族と上手にコミュニケーションが取れてい

なかった結果、このようなことになってしまったんだと思います。そう考えると、人とのコミュニケーションはとても大事だと思うようになりました。

私は、あまり人と話をするのが得意ではありません。でも、人と話をしないと自分の思いも伝わらないし、相手の感情も分からないので自分なりに笑顔で接したりして自分の気持ちを伝えられるように努力しています。

少し前に、学校の総合的な授業の一環で、福祉施設と病院に職業体験に行きました。福祉施設では、最初、お年寄りの方と上手にコミュニケーションが取れず、とても苦労しました。しかし、自分から進んで話しかけるとお年寄りの方も少しずつ心を開いていってくれたように感じました。病院では、部屋の清掃をしたときに、入院されていた患者さんに

「きれいにしてくれて、ありがとう。気持ちよく使わせてもらうね。」

と声をかけてもらい、とてもすがすがしい気分になったことを覚えています。

人からかけてもらうあたたかい言葉は気持ち明るくし、さわやかな気分させます。私は、言葉の力や人とのコミュニケーションは犯罪を未然に防ぎ、抑制することができると思っています。最近、未成年の人の犯罪が多くなつたのは、人と関わる機会が減ったことに関係していると思います。私のように人と話するのが苦手な人も、たくさんいると思いますが、その一人ひとりが苦手意識を克服し、人とのコミュニケーションを大切にしていけば社会を明るくすることにつながると思います。まずは、自分から頑張っていきたいです。

## 「地域に広がる優しさ」

射水市立新湊中学校 二年 **縄**なわ **井**い **若**わか **菜**な

毎年四回程度行われる資源回収。私はいつも休まずに母や父と行っています。資源回収は休みの日なのに朝早くに起きてやらなくてはならないし、重たい新聞紙やとても大きなダンボール、何段にも積み重ねられている本やマンガ、雑誌など、全て自分の手で持って回収しなくてはなりません。だから私はすぐくめんどうくさいし、やりたくないなあと思っていました。

回収する物の中には本や雑誌、ダンボールなどが一つにきれいに束ねられておらず、とても運びにくい物や何回往復して運べばいいのか分からないほどたくさん出している家もあります。私はそれを見た時、「もっと運ぶ人たちの気持ちを考えて出してほしいなあ」と思います。

そんなある日、私が資源回収をしに家の前に置いてある新聞紙を持つとうとした時に、ちょうどその家に住んでおられる方が出てこられました。その人は私を見て、

「朝早くからえらいね。がんばられ。」

と声をかけてくださり、小さなお菓子とジュースをくださいました。応援してくださいる人がいて私はとてもうれしくなりました。その他にも私が大きなダンボールと新聞紙を車の方へと運んでいる時に近くにいた近所の方が、



「重たいやろ。運んであげっちゃ。」

と一緒に手伝ってくださいました。私はこの時「なんて優しい人なんだろう」と思い、やる気と元気が出てきました。このような、ちょっとした心づかいで回収する人は助かったり、がんばろうというやる気がわいてきます。回収する人も回収してもらおう人もお互いに協力し合って資源回収をやっているのだと私はその時思いました。

小学校の時から資源回収を続けていますが小学生の頃は回収場所でそれぞれ運んできた回収物を置く時に、次の人のことなど考えずに特にダンボールなんかは軽いので適当にポイッと投げ置いていました。でも、それに比べて大人の人たちは投げたりなどはせず、きちんと積み重ねて置いていました。だから私もそれから次の人が置きやすいようにきれいに積み重ねて置くようにしています。自分の都合のよいようにという自分勝手な考えではなく、周りの人のことも考えて行動すればきつとみんなが幸せな気持ちになると思っています。

私は以前までは「資源回収なんて、ただめんどくさいだけで、何のやりがいもない」と思っていました。でもこのような経験をして、資源回収は気づかいや優しさであふれているのだなと実感し、もっと進んでやっていこうと思いました。

そして、資源回収だけでなくこの社会全体に対してそういった優しさが一人ひとりになれば、誰もが毎日明るく楽しく暮らせるようになるのではないかと私は思います。

## 「おじいちゃんの野菜」

鹿児島県・鹿児島市立西田小学校 5年 坂元文音

だれも見えていないまっすぐな道。家も近くにはなく、人もあまり通りません。自動販売機よりも目立たず、畑と道路の間にひっそりとある野菜の無人販売所。そこには、ふくろがぎゅうぎゅうになるほどのオクラやゴーヤがたくさん積みまれています。その横にはお金を入れるためのビンがあります。ビンの口は手がかん単に入る大きさです。この無人販売所を見て、あなたはどんなことを考えますか。

わたしのおじいちゃんは、右目が見えません。だけど、ひみつ基地、虫かご、金魚の池など、わたしがリクエストすると、何でも作ってくれます。そんな、おじいちゃんは、しゅ味で野菜と果物三十種類も作っています。真夏の太陽がきらきらとかがやいている暑い日でも、今にも雪がふり出してきそうな寒い日でも、木の葉が全部飛んでしまいうような風の強い日でも、畑に行き、一つ一つの野菜を大切に育てています。

正直に言います。わたしは野菜が苦手です。だけど、おじいちゃんが一生けん命育てている姿を見ると、一つ一つの野菜が、すごく大切なもののようにかがやいて見えます。畑仕事を手伝ううちに、わたしもいくつか野菜を食べられるようになりました。

「あーちゃん、これが今一番おいしいんだよ。食べてごらん。」

と言って、ゴーヤをおいしそうに食べるおじいちゃん。わたしもつられて食べましたが、やっぱり苦かったです。でも、ふしぎと何だかおいしく感じました。

ある日、おじいちゃんが、

「家族だけじゃなくて、みんなにおいしく食べてもらいたいな。」

と言いました。わたしは、これだけ大切に育てられた野菜なので、買って食べた人も、よろこんでくれるだろうと思いい、さん成しました。

何か月もたち、半分、忘れかけていたところおじいちゃんが、無人販売所を作って、百円で野菜を売っているという話を聞きました。さっそく見に行ってみると、たくさん野菜がふくろに入っていました。夕方になり、いつものようにおじいちゃんがお金を集めるので、わたしもいっしょについて行きました。おじいちゃんが集めた手のひらを見て、わたしは、思わずなみだが出そうになりました。おじいちゃんの手の中には、十円玉が二まい。そして、一円玉が一まいのっっているだけでした。これは、百円で買わずに、十円や一円で買う人がいるということでした。わたしは、

「なんで百円じゃないの。」  
と聞くと、

「いろんな人がいるからね。でも、うまかったからまだありますかって聞いてくれる人もいるんだよ。」と笑って答えていました。わたしは、くやしくてしかたがなかったです。毎日大切に育てた野菜が、一円だったり、だまって持つていく人がいたりしたことが、本当に残念で、がっかりしました。わたしに何かできないかと姉といっしょに考えて、かん板を作ることになりました。そこには「おじいちゃんの野菜」と書いて、野菜の絵もたくさんかきました。そして、目立つように、お店につけました。これに、少しでも多くの人気が付いてくれて、何かを感じてくれたら、大成功です。そして、少しでも多くの人におじいちゃんの野菜を食べてもらいたいです。

おじいちゃんの野菜をとったり、お金をごまかしたりすることは、ほんざいです。ほんざいは「やってはいけないこと」です。今回、わたしは、どうしてやってはいけないのかが分かった気がします。それは、みんなが悲しい思いをするからということ。おじいちゃんは「しょうがない」と言って笑っていたけれど、本当はとても悲しかったはず。とつた人はきつと、おじいちゃんやわたしの思いを感じることができないのだと思います。人の気持ちを考えることはむずかしいことだけれど、何より大切なことだと思いました。わたしは、人の気持ちをしっかりと考えて行動したいと思います。そして、おじいちゃんの野菜が心から「おいしい」と思ってもらえたらうれしいです。

## 「許してやらない」

愛知県・幸田町立北部中学校 三年 上<sup>かみ</sup>村<sup>むら</sup>彩<sup>あや</sup>奈<sup>な</sup>

「社会を明るくする運動」というものを、私はこの作文を書くまで何にも知らなかった。犯罪からの立ち直りを支えるもの。私実際にホームページなどを見て調べたことだ。

毎日毎日、世界の日本のどこかで事件が起きている。テレビで事件が伝わってこない日なんて一日もないと思う。私は犯罪を犯した人は何を思っているのだろうと思うことがある。犯罪を犯し、自分自身の家族が悲しみ、被害者の家族が悲しむ。いいことなんて何にもない。よく、「人を殺してみたかった。」という理由をきく。でも私はそれを理由だとは思わない。人の命をそんなに簡単に消すなんて、あつてはならないことだ。

私の弟は、私がまだ小学校一年生の時に交通事故にあつて亡くなっている。まだ五歳ぐらいだ。私は正直、その時のことをあまり覚えていない。授業参観だったその日、先生に廊下に来るように呼ばれた。その時の先生の顔を見て、小学校一年生だった私の目にも何かがあつたんだとわかった。それから隣の家の友達のお母さんといっしょに帰った。家に着いたら母が泣いていた。そこからのことは何にも覚えていない。しばらくの間は学校に行かず、家にいた。いっしょに被害にあつた父のお見舞いに行ったことしか覚えていない。

私は弟を父をこんな目に合わせた人に、一度も会つたことがない。私はその人を一生許してやらないと思つていた。でも、今回の作文をかくために、いろいろ調べて、「許してやらない」の一点張りではいけないんだと思つた。この人は殺したくて交通事故を起こした訳ではない。だれかがこの人のことを受け入れてあげないといけないんだと思つた。日本だけでもたくさん犯罪がある。つまりその分だけ罪を犯してしまった人がいるということだ。そんな人たちは反省と償いを経て社会にもどるが、居場所がなく再び罪をおかしてしまうという。それはあまりにもかわいそうだ。何とかがんばろうとしたのに、また刑務所に戻っていく。悲しい現実だと思つた。

でも、たぶん私も、今の現実社会と同じように「この人本当に大丈夫かな」と冷たい目で見てしまうと思う。しかし、この人たちなりにがんばっているんだから、こちらも受け入れてあげないといけないのかもしれない。

実際に「更生保護」ということをしている人たちがいる。更生保護とは、犯罪や非行をした人の立ち直りを社会の中で見守り、地域の力で支えていく取り組みのことだ。私は、このような取り組みがあることを知らなかった。お祭りに行ったときに、「社会を明るくする運動」とかかれたパンフレットをもらった。いつもなら見ないで捨てていると思う。でも、まだこの時は何を書くか迷っていた時で、見覚えのある言葉にひかれ、中を見ていった。たぶん読んでいたのは私だけだったと思う。きっかけがないから興味が湧かない。興味がなければ何も見ない。そして捨てる。負のサイクルだ。パンフレットにも犯罪を犯した人が再生することについて書かれていた。犯罪を犯す。反省や償いをする。社会復帰をする。でも、居場所がない。そしてまた犯罪に手を染める。だが、この負のサイクルの「反省や償いをする。」の後に、「地域社会とつながる。」というものが入る。すると、社会復帰ができ、犯罪の道へは進まないというものだ。私は当然だと思った。しかし、私のようにこの活動のこと自体をしらなかつたら、いつまでたっても「社会を明るくする運動」ができていかない。それにこれはボランティアだ。保護司として全国で約四万八千人の人が活動している。しかし、この約四万八千人の人だけが一生懸命がんばっていても意味がない。日本にいる人全員が、世界中の人全員がこの活動を知り、協力しようという意識がないといけない。

身近なところに罪を犯してしまった人がいることを誰もわからない。そして、私はもう中学三年生だ。あと一年もしないうちに義務教育から卒業する。そして数年もすれば社会に出る。社会に出るということは、多くの人々と関わっていくことだ。もしかしたら、だれにも言いたくない過去を持っている人と関わらなければならなくなるかもしれない。それでも私は、そんな人を受け入れていきたいと思う。周りの人がどんな目をしていても、自分の意思でその人の支えになりたい。

私は会ったこともない人に対して、ひどいことを思っていた。弟にしたことは今でも許せない。しかし、「許せない」という気持ちと社会で受け入れず、排斥することとは別だと思えてきた。社会で更生しようとする人を温かく受け入れることこそ、すべての人が安心して過ごせる社会になるのだと思う。



第65回 ”社会を明るくする運動“

# 作品コンテスト ポスターの部



作品コンテスト ポスターの部 入賞者

★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★
射水市立新湊南部中学校	射水市立大島小学校	射水市立大門小学校	射水市立下村小学校	射水市立金山小学校	射水市立小杉小学校	射水市立小杉小学校	射水市立塚原小学校	射水市立東明小学校	射水市立東明小学校	射水市立堀岡小学校	射水市立作道小学校
三年	五年	五年	六年	五年	六年	六年	五年	五年	五年	五年	五年
木	棚	土	山	水	中	金	荒	海	岡	原	長
谷	元	合	口	上	川	子	瀧	野	田	田	田
凧	祐	美	円		紅	蒼		凧	恵	莉	映
咲	吏	佑	香	楓	海	奈	葵	子	祐	沙	佑



第65回 ”社会を明るくする運動“

# 作品コンテスト 標語の部



## 小学校の部

★その笑顔	わたしに元気	くれている	射水市立放生津小学校	六年	鳥	と	と	瞳	ひとみ
★おはようの言葉	でつながる	心と心	射水市立作道小学校	六年	宮	みや	崎	つばさ	翼
★犯罪は	あくの道への	第一歩	射水市立堀岡小学校	四年	村	むら	田	ひろ	宏
★あいさつは	明るい笑顔で	自分から	射水市立東明小学校	四年	岩	いわ	井	れんたろう	蓮太郎
★だれにでも	ニコニコあいさつ	元気よく	射水市立塚原小学校	五年	明	あか	石	けん	健
★あいさつは	みんなをえ顔に	するまほう	射水市立小杉小学校	四年	西	にし	田	ゆめ	夢
★万引きは	絶対ダメだよ	犯罪だ	射水市立歌の森小学校	四年	大	おお	坪	ゆ	結
★思いやる	気持ちがあれば	みな笑顔	射水市立中太閤山小学校	五年	仕	し	切	ゆな	優那
★スマートフォン	無料の言葉	やみのドア	射水市立下村小学校	五年	澤	さわ	李	りおな	李緒菜
★ありがとう	その一言で	いい気持ち	射水市立大門小学校	四年	石	いし	井	い	のどか
★あいさつで	みんなわくわく	元気な子	射水市立大島小学校	四年	川	かわ	原	あゆ	歩
								た	太

## 中学校の部

★おはようで 始まる今日も 楽しい日

射水市立新湊中学校 二年

手 林 奈 央

第34回 射水市中学生

# 生活体験発表大会



〔射水市推進委員会推薦作品〕

## 「今、自分を乗り越える」

射水市立大門中学校 三年 佐藤美緑

「今まで精一杯頑張ってきたからね。疲れたよね。水泳、やめてもいいよ。他にも頑張れるところがたくさんあるから。」

これは長い長いスランプに悩み、

「もう、泳ぎたくないな。」

と、思わずこぼしてしまった私に、母が言ってくれた言葉です。

五歳で水泳を始めた私は、七歳のときに選手コースに移りました。このコースの練習は月曜日から土曜日まで毎晩遅くまであります。日々のハードな練習は、共に頑張る仲間がいるから、乗り越えることができます。応援してくれる家族がいるから続けてこられました。

小さい頃は、一緒に水泳を習い始めた兄に追いつきたくて、必死に練習に励みました。頑張れば頑張る程、記録は伸びていき、試合に出場する度に達成感を味わうことができました。

しかし、中学生になった頃から、思うように記録が伸びなくなり、それと共に、どんどん下から追い越されていくようになってしまいました。初めて負けた時には、悔しくて涙することもあったけれど、だんだんと開き直すようになり、悔しさに鈍感になってきました。いや、鈍感になろうとするようになったのかもしれない。本当は悔しくて仕方がないのに。そんな私に、クラブのコーチは、

「頭で計算して練習するな。全力でいけ。」

と言います。心の中で「そんなの無理だ」と反発している自分がいいます。また、

「もっと自信を持って。」

と言われれば、「どうやって自信を持てばいいの」と心の中で言い返してしまいます。

本当は自分でも分かっているのに。学年が上がるにつれて、やりたいこと、やらなくてはいけないことが増えて、以前みたいに水泳に打ち込めていないこと。自分の限界を自分で決めて、諦めてしまっていること。そんなスランプに悩む私だけれど、忘れられない思い出があります。

去年の七月の富山県中学校選手権大会。二日間に渡る大会の最終種目である四〇〇メートルフリーレーの決勝。七歳の時から一緒に泳いできた大切な一学年上の友人にとっては中学校生活最後のチャンスでした。どうしても一緒に北信越大会に出場しなかった私は、最終泳者でした。自分でも信じられないくらいの集中力で泳ぎきり、順位を三つ上げ、三位でぎりぎり北信越大会出場を決めることができました。みんな喜び合った嬉しさは、忘れることのできない、大切な思い出です。四位のチームとは、〇・三秒差でした。

私は時々思うことがあります。たったコンマ何秒のタイムを縮めるために、一体何百時間の練習をしなくてはいけないのだろう。そして、たくさんの人に支えてもらっている私は、その人達に何か返すことができているのだろうか、と。

三年生になった今、今度は自分が中学校生活最後のシーズンを迎えようとしています。今のままではいけないことは、わかっています。もう一度奮起しなくてはいけないことも。諦めてはいけないことも。

いつも親身に指導してくれるコーチ。結果ではなく、頑張る姿に感動し、応援してくれる家族。一緒に厳しい練習を乗り越えてきた仲間達。すべての人に私の頑張る姿を見てもらいたいです。たとえ思うような結果を出すことができなくても、胸を張って精一杯頑張ったと言えるならば、決して後悔はしないはずだから。そして、自分がこれからの人生をしっかりと前を向いて歩いていくことができるように、今、弱い自分を乗り越えます。

# 「たった一人の妹のために」

射水市立小杉中学校 三年 高畑成美

私の妹は十二歳です。私が三歳の時に妹は生まれました。たった一人の妹ができたことに、「一緒に遊べる。」とても嬉しくなりました。けれども、妹は生まれた時からの障害をもっており、手足が不自由で話すこともできなかつたのです。

妹は歩いたり、一人でお風呂に入ったりすることができません。私は姉として、妹の世話をまかされるようになってきました。二日に一度は母と一緒にお風呂に入れ、母のいないときは車イスを押ししたり、ご飯を食べさせてあげたりします。母のまねをしてやってみただけで、体力を使ったり頭を使ったりと大変なことばかりでした。私がやるのは当然だとは思っていても、「何故私がしなければいけないの」と言ってしまうこともありました。

私が小学四年生の頃、家族で旅行に行くことになりました。妹は歩けないので車イスに乗っていました。すると、通りすぎる人々にじろじろと見られていることに気がつきました。小さい頃は何とも思っていなかったのに、妹の横を歩いていると自分もどう思われているのか気になり、一緒にいることが恥ずかしいような気持ちになりました。そのことをきっかけに、妹が普通の子だったらよかつたのにと考えてしまうことがあり、そんな自分がとても嫌でした。

昨年、母がふと私に「いつかはやらなきゃいけないんだよ。その時はよろしくね。」と言いました。私は将来、母と父がいなくなつたときどうしよう、妹を支えられるのかととても心配になり、その責任の重さに胸が押しつぶされそ

うになりました。

そんなある時、妹の通っている支援学校の運動会を見に行くことになりました。支援学校の先生と一緒に楽しく頑張っている妹やまわりの皆の姿を見て、私はとても感動しました。自分の力をふりしぼって、必死に頑張っていること。盛大なパフォーマンスをつくりあげていることに「すごい」という言葉しかでませんでした。また家でも、今年五歳になった弟をあやすようにして手をのばしてみたりさわってみたりとお姉ちゃんらしい姿を見せることがありません。それに妹が笑うととてもかわいくて、そんな姿を見ると家族皆が嬉しくなります。そして、妹の笑顔がもっと増えたらいいなと心から思うようになりました。

私は妹のことが大好きです。たった一人のかけがえない妹です。そんな妹のために、ほかの障害をもっている人のために、助けになりたいと考えています。確かに妹は体が不自由だけれど、清らかな笑顔とやさしい心を持ち、一生懸命生きています。たとえ障害をもってもそれぞれの良さをもち、一生懸命生きていて、皆が大切な存在なのです。私達が楽しく生活しているように妹達も楽しく生活しています。もし障害をもっている人を見かけたら温かい目で見守る。これが私達にできることだと思います。

私は今でも妹に向けられる視線を気にしてしまうことがあります。母も少し前までは同じことを考えていたと聞きました。それでも母は妹のことを優先させています。きっと母にとっても妹の笑顔が大切なのだと今も私にも分かれます。私も周りを気にしない母のような強い心を持ちたいです。妹と一緒に笑顔で楽しく生きていくために。

## 「家族のおかげで」

射水市立射北中学校 三年 土井 明音

みなさんは、風邪や病気にかかったときにいつも誰に看病してもらっていますか。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、あるいは兄弟かもしれません。そして、そのとき感謝の気持ちを伝えていきますか。

私は、0歳のときに心臓病で手術し、入院しました。私はまだ小さかったので、そのことは覚えていません。でも、入院中小さかった私を父、母、祖父、祖母みんなが看病してくれたのだと思います。きっと家族のみんなは、毎日私の看病をしていて、疲れていただろうと思います。私はそんな家族のみんながいたからこそ、今ここにいます。だと本当に感謝しています。だけどそのとき、私はしっかりと感謝の気持ちを伝えられていたかどうかは、分かりません。

私は、親からいつ自分の病気について聞いたのかよく覚えていません。でも、小学校に入学して、一年生の持久走大会の前に私は母に

「無理しられんな。つらかったら歩いてもいいがやよ」

と言われました。それは、心臓病だった私を想う母の優しい気持ちだったんだろうなと思います。私はその言葉で励まされましたが、同時に絶対に歩きたくないと思いました。本番では歩かず走り切ることができて、本当によかったです。手術の後は激しい運動ができるようになる人もいれば、できなくなる人もいてその人によって違いがあります。私の場合は、心臓病のことなんて気にせず、いつも普通の人以上に走り回っていました。だけど年に一度の検診がある度に私はとても緊張していました。検診にはいつも母と二人で行っていて、母はいつも私に



「大丈夫？」

と声をかけてくれます。たった一言だけど、なぜかとても緊張がほぐれ、安心して検査を受けられました。こうして、中学生になり、先生に検査は二年に一度でも大丈夫だと言われるようになりました。ここまでやってこられたのも家族みんなのおかげだな。本当によかったと思いました。

現在では、運動制限もなくなり、ソフトボール部で活動しています。

私は心臓病になり、人はそれぞれ違うんだと改めて感じました。今現在、病気の治った人はたくさんいます。また、今もお病気で苦しんでいる人もたくさんいます。病気は精神面がとてつらいです。だから、病気の人の中には病気になっていない人に対して「ずるいな」と感じている人も少なくないと思います。でも、私は、人はそれぞれ違って、その命は母や父から頂いた本当に大切なものだと考えています。だからどんな困難にも立ち向かい、他の人と比べてばかりいないで、自分なりに最高の日々にしていきたいと思っています。

そして、私がもう一つ忘れてはいけないこと、それは感謝です。私は手術したいは覚えていますませんが、体に証拠が残っています。それは、手術のあとと、点滴のあとです。これは支えてくださったみなさんが努力してくださったあとだと思います。このあとはずっと消えないかもしれないけど、私はそれでもいいと思っています。なぜなら、このあとを見るたびに私の命を救ってくれた大切な人々の存在を忘れないからです。私は、今まで言えなかった分の感謝の気持ちをしっかりと自分の言葉で、

「ありがとう」

と伝えていきたいと思っています。

# 「人のためにできること」

射水市立新湊中学校 三年 島<sup>しま</sup> 遙<sup>はる</sup> 香<sup>か</sup>

「♪生きていくことの意味、問いかけるそのたびに 胸をよぎる愛しい 人々の温かさ」この曲は、昨年全校合唱で歌った「いのちの歌」です。毎日の生活の中で、悩んだり迷ったりしたとき、この歌が私に勇気を与えてくれます。私が普段から心がけていることは、人のために何かをすることです。何かをしようとすることも、大きなことはできませんが少しでも人の役に立ちたいと思っています。そんな思いの中、命について深く考える出来事がありました。

中学二年生の頃、学校帰りのことでした。私は、電車通学のためいつものように駅で電車を待っていました。庄川橋の道路のほうでオパールをひきながら歩くおばあさんを見ました。オパールとは、手押し車のことです。おばあさんは、歩道があるのに車道を歩いていたので大丈夫かなと心配しながらみていました。少ししてから線路の前に来ました。私は、「転んだりしないかな」「大丈夫かな」とおばあさんのことを見ていました。その時、オパールの足が線路の間に引っかかり、抜けない状態になってしまいました。その瞬間に踏切の鐘が鳴り、遮断機が下りてきたのです。私は何も考えずにおばあさんの方へかけよりました。おばあさんは焦っていて「動かん、動かん」と言っていました。オパールの足を抜こうとしているその時に電車が来ました。私はとても焦り「怖い」と思いましたが、一刻も早く抜いて線路から離れないといけないと必死でした。そんな時、一緒にいた友達が私のところへ走ってきてくれました。ま

た、近くにいたおじさんも来てくれました。そのおじさんは、おばあさんに「大丈夫だよ」と声をかけておられました。するとさつきまで焦っていたおばあさんは落ち着いてこられたようでした。そしてついに三人でおばあさんを助けることができました。おばあさんは「ありがとう」「ありがとう」と何度もおじぎをされました。おじさんは「ああ、良かったね。でも危なかった。」と一言残して帰っていかれました。「そうだ」その時は、ただ必死だったけれど「危なかった」…。そう思い返してみると、怖さで体が震えました。後から考えると自分のとった行動は本当に良かったのだろうか。おばあさんを助けたい一心だったけれど、自分も命が危ない状態だった。もし自分に何かあったとき、家族は悲しむだろう。でもやっぱりおばあさんを助けることができ、本当によかったと思いました。

この出来事を通して、人の役に立ちたい、人を助けたいと思う気持ちが以前より強くなりました。そして自分の周りの人の命も、私自身の命もかけがえのないものだ実感しています。

誰かを思う気持ち、優しさを行動に表すことを大切にし、もし誰かが困っているのを見かけたら、自分から積極的に声をかけたり、行動したりしていききたいと思います。それは今、生きているからできることです。「生きていること」をもっと強く感じたいと思います。

私はこれから、少しでも人の役に立つ人になっていききたいと思います。

# 「生まれる前からずっと」

射水市立小杉南中学校 二年 小<sup>お</sup>川<sup>がわ</sup>真<sup>ま</sup>穂<sup>ほ</sup>

近所に私が「マロンのおばちゃん」と呼ぶ人がいます。「マロン」とはミニチュアダックスフンドの名前で、おばちゃんはマロンの飼い主です。

私は犬が大好きですが、家では飼っていません。だからマロンに会えるのがとても楽しみで、しょっちゅうおばちゃんの家に行っては触らせてもらったり、散歩について行ったりしていました。

また、登下校の時にマロンの家の前を通る時には、いつも「マローン！」と声をかけていました。すると、マロンはしっぽをふってワンワンと答えてくれました。そのうち、声をかけなくても私が来た匂いで分かるようになったのか、私が家の近くに行くだけでワンワン吠えるようになりました。マロンのあまりの騒ぎぶりを見かねたので、おばちゃんはマロンを抱っこして

「いってらっしゃい。」

「氣いつけてかれ。」

と見送ってくれるようになりました。

小学五年生の冬。おばちゃんとマロンの姿をぱったりと見かけなくなりました。「どうしたのかな？」と私は心配しました。しばらくして、マロンのおばちゃんが病気で入院していることが分かりました。日が経つにつれ、マロンに会えない寂しさ、おばちゃんの状態が分からない不安に心配する日々を過ごしました。さらに時が流れ、おばちゃんが無事退院できたと聞いた時は、心がホッとしました。

しかし病気のために、マロンのおばちゃんは外出するのを控えるようになりました。家にいる気配はあるのですが、おばちゃんの顔を見られない日が続きました。

中学校の入学式の日。私と母は学校へ行く途中、マロンのおばちゃんの家の前を通りました。すると「ワンワン！」と久しぶりにマロンの声が聞こえたのです！振り向くと、サンルームにマロンとおばちゃんの姿がありました。おばちゃんが退院してから初めて会えたのです。おばちゃんもマロンも元気そうでした。おばちゃんは

「真穂ちゃん、立派になったね。制服もよく似合ってるよ。」

と声をかけてくれました。入学式の朝にこんなうれしいことがあったので、きつといい中学校生活になる！と、その日一日、とても晴れ晴れした気分でも過ごせたのを覚えています。

この日から、おばちゃんとマロンを時々見かけるようになりました。おばちゃんは外に出なくても、サンルームの網戸越しに

「おかえり。」

「うちの人、みんな元気け？」

と声をかけてくれます。それは今も続いています。

それだけではありません。実は、マロンのおばちゃんは、私が母のお腹にいる時から気にかけてくれていたそうです。兄がいるので「今度は女の子で楽しみやね。」と喜んでくれ、切迫早産で生まれそうだった時には「一日でも長くお腹におられえ。」と心配もしてくれたそうです。

家族でもないのに、ずっと成長を見守ってくれる人がいる。そんなことはめったにない事です。だからとてもありがたしい、うれしくて、幸せなことだと思います。

おばちゃんと、生まれる前からずっとつながっていたと知った時、人と人はどこでどのようにつながっているか分からないものだと思います。だからこそ、一つ一つの出会いを大切にしなければいけないとつくづく思います。

私もこれから、どんな人と出会っていくのでしょうか。そして、どんな縁とつながっているのでしょうか。とても楽しみです。

# 「平和を願って」

射水市立新湊南部中学校 三年 高田菜生

「戦争」この言葉を聞くと、皆さんは何をかんじますか。「戦争」そこからは一体何が生まれるのでしょうか。何が奪われていくのでしょうか。

私が戦争について考えるきっかけとなったのは二年生、修学旅行で訪れる広島の前学習で平和について学んだときです。初めは、富山大空襲を体験した方の講演会に向けて資料を読みました。そこに記されていたのは、多くの犠牲、悲惨な現状、当時の苦しい生活でした。

家に帰ってその話をする、祖父は私の曾祖父が戦争で亡くなった話をしてくれました。祖父は、「わしが生まれる前に父親は亡くなり、その顔を実際に見たことはないんだ。写真でその顔を知ったけれど一目でいいから会いたかったな。」と話してくれました。私の曾祖母は、女手一つでその祖父を育てるために採石場で重労働をし、祖父は父親がいないせいでひどいいじめを受け、悔しい思いをしたと言います。穏やかに語る今の祖父からは、とても想像できない話でした。

数日後、富山大空襲を受けた方の講演会がありました。その中にあった「日本は被害者であり、加害者だ。」という言葉に、私は強いショックをうけました。「日本は戦争で被害にあった国」というイメージしかなかった私は、その言葉を聞いて「日本も同じように他の国に害を与えてしまった」ということを忘れてはいけなそう思いました。

そして先週、私は修学旅行で広島平和記念資料館を訪れました。セレモニーでは、平和を願ってみんなで合唱し、

千羽鶴を捧げてきました。見学した「平和の鐘」には、国境のない地図が描かれており、「国境のない世界は一つで、戦争など起こるはずがない、起こしてはならないのだ。」という強い思いが込められていることを感じました。

事前学習で戦争の原爆シーンを描いたビデオを見たとき、崩れ落ちた家屋や焼けただれた人の体など、そのあまりの悲惨な現状を私は直視することができませんでした。しかし、広島資料館では、生死をさまよう人々の写真や焼け焦げた品の数々から目を背けてはならないと感じました。実際はビデオで見た何十倍もの恐ろしい現実があったことを思うと、それを自分の肌で感じなければ、ここへ来た意味がないと思ったからです。

これらの平和学習を通して私は、学校へ通えること、友達と一緒に部活動ができること、家族がいて毎日温かいご飯が食べられること、好きな本が読めること…そんな当たり前の日常が、十分すぎるくらい幸せなことだと気付くことができました。

世界にはまだまだ戦争をしている国があります。核兵器を持っている国もあります。そんな国の人たちにも、もう戦争と言う惨劇を二度と繰り返してほしくはないと思います。いつかみんなが笑顔になるように、世界に平和が訪れますようにいつそう願わずにはられません。

この平和学習を始めた頃から私は、家の神棚や仏壇、曾祖父父母の遺影に手を合わせるようになりました。それは、毎日平和で安心して生活できることへの感謝と、その穏やかな日常が続くことへの祈りの気持ちからです。

私は、戦争の本当の恐ろしさを体験したわけではありません。だからこそ、戦争について学び、平和について考える必要があるのだと思います。戦争がもたらした悲劇を心に留め、これからも今の生活に感謝して生きること。それが、今の私たちにできる「平和」への第一歩だと私は考えます。





第65回 社会を明るくする運動  
— 作文・ポスター・標語 —  
第34回 中学生生活体験発表

---

平成27年12月

発行・編集

“社会を明るくする運動”射水市推進委員会  
射水保護司会

主催/法務省 

人はみな、  
生かされて  
生きてゆく。



更生保護法人 全国保護司連盟 更生保護法人 日本更生保護協会

犯罪や非行を防止し、立ち直りを交える地域のチカラ **第65回 社会を明るくする運動**

犯罪対策啓発広場（〒814-8512 251007） 犯罪に屈らない・戻さない ～立ち直りをみんなで交える明るい社会～